

| | |
|----------|---------------------------|
| 氏名 | いの また つよし 猪 股 剛 |
| 学位(専攻分野) | 博 士 (教 育 学) |
| 学位記番号 | 教 博 第 31 号 |
| 学位授与の日付 | 平 成 15 年 3 月 24 日 |
| 学位授与の要件 | 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当 |
| 研究科・専攻 | 教 育 学 研 究 科 臨 床 教 育 学 専 攻 |
| 学位論文題目 | 心理学の時間 ——歴史意識の時代の中で—— |

論文調査委員 (主査) 助教授 河合俊雄 教授 山中康裕 教授 矢野智司

論 文 内 容 の 要 旨

この論考全体を通じて、その縦糸となっている根本命題は、歴史意識の問題性である。

まず序章では、この歴史意識がわれわれの現代の日常にどれほどまでに浸透し、それが自然な意識の運動として根付くことになっているかが概観された。人間という存在が、自然によって取り囲まれ、その存在全体をもって自然の脅威に曝されているという世界の構造は近代において成立しなくなり、その関係が転覆する。われわれは自己意識と共に自然の脅威から自由となり、盲目の時代が光にあふれた啓蒙の時代へと移り変わっていく。しかしながら野性的な自然性からの解放は、人間意識の無限な自由を保障するものなどではない。むしろここに生じた、時間と存在を振り返る歴史意識は、野性的な自然以上に、より巧妙に人間存在を取り囲むことになる。歴史意識の対岸の避難所というものは、ただ意識の内に想定することはできるかもしれないが、それは本来的に歴史意識の内側でしかない。しかも、それは野性性が眼に見える具体的な脅威であったのに比べて、より巧妙に、目には映らない形でわれわれの存在を取り囲んでいるのである。この歴史意識の内側における人間存在という命題が、この論文全体を通して一本の縦軸となっている。

第1章の始まりにおいて、現代の深層心理学の祖先とも言うべきニーチェの歴史批判が検討される。ニーチェの生という視点に立つ歴史批判が、本来的な歴史意識の幕開けを示す。この歴史の生み出す神経症と心理学はどのように対決すべきなのかが、ユングの歴史に対する態度からひも解かれてゆく。歴史の神経症こそが私たちが現代へと足を下ろしていくための不可欠の病であることが認識され、心理学がその神経症を安易に退けようとするのではなく、それとどのように対話していくかが問われる。ベンヤミンが歴史の姿として描き出す「せむしの小人」が私たちにそのヒントを与えてくれる。単純な歴史の排除と、そこから生まれてくる神話や病理的なものの意味への信頼は、逆に神話的な意味での単純な歴史性へ回帰であることが示される。心理学とはこの歴史性との対話をその基本とし、その歴史意識をおのれの土台に据えながらも同時にその土台となる歴史意識を常に「現在性」によって使用していく学問なのである。そうした意味で心理学は、絶え間ない土台喪失の試みであって、「現在性」と「歴史性」との絶え間ない弁証法的な運動そのものなのである。

第2章では、「魂の静寂—心理学と物語とその静止—」という題目で、臨床心理学、特にユング的な心理学における物語の功罪が検討される。ある分裂病における、物語とはかけ離れたヴィジョンを心理学がどう受け入れていくかが問われる。その前提として、まずは心理学における物語の意義が検討され、自分の持つ物語が単純な固定的な因果的な筋から脱して、動きのあるものへの展開していくことの臨床的な意味が明らかにされる。しかしまた一方で、どんなにすばらしい躍動的な物語でも、語りが終わり、一つの筋がわれわれの意識によって反省された時点で、意味の固定化へと進まざるをえない。この固定化の問題をベンヤミンは「神話的暴力」として理解する。物語は確かに私たちに動きのある生を運んできてくれるものであるが、そこには同時に物語へと無理やりに巻き込んでいくという暴力性が付き物でもある。物語の世界へ巻き込まれていくことへの本質的な拒否としての精神病状態がここでは注目される。物語こそがわれわれを癒すと同時に、物語こそがわれわれの病である。私たちは、もはや物語をつむぐことはできない。単純に達成可能な物語の終わりは無く、弁証法的な

動きは静止していく。ベンヤミンのいう「静止状態の弁証法」が、心理学が物語への捕われから、本来の心理学的弁証法を身に付けていく唯一の道である。この弁証法の静止というイメージが、現在の嵐に吹きあらされるこの場に、人間の場を開く。

第3章では、心理学の内語られる「可能性と倫理」の問題を検討する。倫理という社会的あるいは歴史的な意味合いを持つとされる当為が、自己実現や個性化という可能性を重んじる心理学の中でいかなる意味合いを持つかが検討される。その際、フロイト、ラカン、ユングの倫理概念が検討される。そしてユングの倫理の本質が明らかにされていく。倫理に可能性が並び立たない限りは、法は道徳の段階に留まらざるを得ず、可能性があるからこそ倫理は他者との出会いの中でも自由を獲得できる力を感じ、倫理へと変化していくことを促される。また逆に、倫理があるからこそ可能性は偶然性や特殊性の段階に留まることなく、内なる可能態にとどまることなく、現実の場で現実態へと変化していくことを促され、存在論的な意味でこの世界で行為することへと促されていく。

第4章では、心理療法の二つのあり方が扱われる。すなわち、イメージの心理学と弁証法形式の心理学である。イメージの心理学への意義の一つは、いわゆる現代において固定化している物事の意味をその固定化から開放していくところにある。そこに手仕事としてのイメージの心理療法が立ち上がってくる。そしてここでは、心理学の中で治療とのアナロジーとして日々象徴的な仕方で使用されている織物のイメージを研究し、その意味を解き明かしていくことになる。

そのうえで、この「手仕事」というものが本当に現代で可能なのかどうか問われて行く。手仕事のようなオリジナリティを発揮するような個性化の道に進むことが現代でもあるのだろうか。まずは端的にユング心理学の個性化という概念の問題性を見極める。個性化というものを実体化してしまうユング派の誤りや、個性化を達成目標からプロセスへと読み替えてもまだ残りつづけるオリジナリティというものへの信仰が検討されていく。そして、ベンヤミンの「複製技術」と「写真小史」の論考を頼りに、オリジナリティ重視のあり方からコピーの意味の本質へと心理学が展開しなければならない必然性が語られる。

第5章では、これまでの歴史意識批判を踏まえた上で、しかし一つの童話・浦島太郎物語を心理学的に読み解く作業に当たる。その際日常的な現実性と深層心理学が重視する心的現実とを検討し、単純な心的現実の心理学における不十分さを検討した上で、この日常的現実と心的現実という二つの現実の弁証法的止揚としてある心理学の現実注目することになる。そこで、心理学のあり方のアナロジーとして浦島物語が意味付けされていくことで、「統一と対立」の統一としての心理学が姿をあらわすことになる。

論文審査の結果の要旨

この論文は、歴史意識の成立と心理学の関係を扱ったものである。端的に述べると、近代において成立した歴史意識というのは、人間が自然に取り囲まれていた状態が転覆されて、すべてが歴史意識の中に、物語の中において、その外に出ることができないという状態に変わったことである。そしてその歴史意識の成立そのものが、内面化などということのパラダイムとする心理学なのである。従って歴史意識の成立とは、心理学の成立に他ならない。内面化という概念にも示されているように、心理学のパラダイムを空間論的メタファーで、また存在論的に検討したものはこれまでもあったけれども、実体化しにくい歴史意識との関連で捉えなおしたところに本論文の特色があると考えられる。そしてその意味では、心理学、心理臨床を広いコンテキストで捉えなおした貴重な論文であると言えよう。

第1章では、歴史意識と心理学の成立が、ヘーゲル的に捉え直されていく。これはいわばユング心理学を動くものとして、『精神の現象学』をいわば思索のモデルとして捉え直したもので、魂の論理学とも言えよう。繰り返しが多く、冗長で難解であるという指摘もあったけれども、むずかしい問題に真摯に取り組み、思索している姿勢は好感が持たれた。その手がかりとしてニーチェとベンヤミンが用いられているのは、まさにヘーゲルとは逆と考えられている二人なので、意外な印象を与える。けれども、ここでは正反合という過程として捉えられたヘーゲル主義と、あくまで分裂し、動いていくものとしての弁証法を唱えていくヘーゲルが区別されており、それによれば、ニーチェとベンヤミンこそまさにヘーゲル的であり、ヘーゲルの継承者なのである。

その中では、ベンヤミンに関する部分が高い評価を受けた。特に「靴下の比喩」によって歴史意識の成立を述べていると

ころが興味深い。靴下を裏返すことは、まさに人間が自然に包まれていたあり方が転覆して、すべてを包んでしまう意識が成立することであるけれども、裏返してみてもやっぱり空っぽであるというところに、今度は意識を実体化し、存在論化することが超えられている。またベンヤミンが様々なコンテキストで歴史の姿として描き出す「せむしの小人」の取り上げ方と解釈も当を得ていた。この章に限らず、ベンヤミンに関する引用や解釈は、非常にすぐれており、マテリアルにうまく語らせる手法は成功していると言えよう。またこのような扱いが可能なのは、ベンヤミンを相当によく読み込んでいることが伺われた。

第2章では、よく心理臨床においてパラダイムにされる物語が批判的に検討される。フロイト初期における「お話による治療」を待たずとも、物語が心理臨床において果たす意味というのは否定できないけれども、物語に意味を固定してしまう問題点があるのも事実である。そこで弁証法的な動きというのが重要になるわけであるけれども、ここでベンヤミンのいう「静止状態の弁証法」が取り上げられるのが興味深い。弁証法の持つ動き自体も固定されたものになりがちであるのに対して、静止ということを取り上げることによって、論は深まっていると言えよう。このように動くということさえも固定しないような、動的な書き方は徹底されている。

第3章においては、心理学と倫理の関係が論じられる。ここでの倫理は、昨今よく倫理規定との関連で問題になる倫理や、絶対的な喪失がまた同時に欲望を駆り立てるようなラカンにおける倫理でもない。倫理と可能性を並置して述べているユングを手がかりに、まさにそれによって現実性に至ることが導き出されるのは興味深い。

第4章の前半では、イメージの心理学と弁証法形式の心理学が対置される。後半では、オリジナルとコピーの関係が論じられる。元型や個性化という考えに現れているように、ユング心理学というのはオリジナルを志向する心理学である。それに対してベンヤミンの「複製技術」と「写真小史」の論考を頼りに、オリジナリティ重視のあり方からコピーの意味の本質へと心理学が展開しなければならない必然性が語られるところは、現代思想の流れからして、予想がつくことであろう。しかし本論文の姿勢として特筆すべきなのは、そのような現代思想的、ポスト・モダンの思想でオリジナルがないとは言い切らずに、本質的なコピーとオリジナリティの対話が、心理学の運動であり、魂の個性化の道であるとするところである。このあたりにも心理臨床に基づいての思想的議論であり、現実性についての論考であることが伺われる。

第5章では、これまでの歴史意識批判を踏まえて、浦島太郎の物語が心理学的に解釈され、現実性の問題が考察される。これも前章におけるイメージの心理学と弁証法形式の心理学の対立を受けていると言えよう。その中では、かっぱとの相撲のイメージを援用することで、戦いがないとされる浦島太郎の物語に犠牲と勝負の契機を見だし、そこから意識の成立を考察したところが興味深い。また玉手箱をイメージの否定と現実への到達として捉えているところがこの章の眼目であり、注目に値する。深層心理学は日常的な現実性に対立する心的現実を重視する。しかしそれでは二つの現実是对立したままになる。それに対して、玉手箱という否定の契機、しかもそれをいわば実体化し、行動化してやり抜くことによって、その二つを止揚した心理学的な現実に至れるという解釈は説得力を持ち、心理臨床における現実性について示唆してくれるところが大きい。

全体として論考の仕方が冗長で難解なことはあっても、心理学と現実性の成立といういわば心理臨床の根本問題に取り組み、しかも巧みなマテリアルの選び方をしている本論文は、心理臨床、およびその関連領域に対する重要な貢献であると思われる。

よって本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成15年2月20日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。